

Asia Center Lecture Series

# アジア理解講座

1997年度第1期

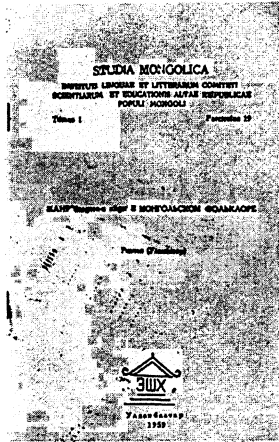
## 「モンゴル文学を味わう」

報告書





モンゴルの口承文芸と書かれた文学(書写文学、書面文学)の双方を基盤として成立していったわけです。特に、口承文芸における韻文の形式、昔話などに描かれている芸術的な人間像、韻文や散文に使われているさまざまな美的言語などを受容して近現代文学は成立してきたとされています。



ビャムビン・リンチェンのロシア語による  
研究論文【モンゴル口承文芸におけるベンス  
ニー・ウリゲルのジャンル】の表紙  
(出典：Бямбын Ринчен, 《Жанр д[б]лэгсгэн-  
ц[ü] у[ü]лгээр в Монгольском фольклоре》,  
Улаанбаатар, 1959)

# 第3章 モンゴル口承文芸(1) 生活に密着した口頭伝承と韻文

講師—上村 明



- 資料5  
モンゴル口承文芸のジャンル分けの一例
- ことわざ・格言
  - 世界の3つ
  - なぞなぞ
  - 歌謡
    - 労働の歌
    - 儀礼の歌
    - 生活叙情歌謡
      - 恋愛叙情歌
      - 子守歌
      - 出会いの歌
      - 恩の歌
      - 悲しみの歌
      - 称える歌
      - 笑いの歌
    - 歴史の歌
  - 遊びの口承文芸
    - 掛け合い歌
    - 即興の韻文
    - 遊びに使う言葉
  - 儀礼に関連した口承文芸
    - 婚礼・宴の言葉
    - まじない言葉
    - 呪い言葉
  - シャーマニズムの韻文
    - 黒シャーマンの招魂歌
    - 半仏教化したシャーマンの招魂歌
    - 仏教化したシャーマンの招魂歌
  - 祝詞
  - 諷刺
  - 民話
    - 神話的民話
    - 動物民話
    - 魔法民話
    - 生活民話
      - 一般生活の民話
      - 冒険民話
      - 笑い話
  - 伝説
    - 歴史人物に関する伝説
    - 土地の伝説
    - 集団に関する伝説
  - 世間話
  - 滑稽話
  - 近代の口承文芸
    - ことわざ・格言
    - なぞなぞ
    - 歌謡
    - 祝詞・諷刺
    - 民話
- (出典：Sh. ガーダムバ、D. ツェレンソドノム編『モンゴル口承文芸集』1978)

モンゴル文学は韻文とパフォーマンスの要素が強く、口承文芸がとて大きな位置を占めています。モンゴルは20世紀初めになってからようやく近代化が始まった国なので、それまで伝典が木版本などで出版されるということはありませんでしたが、日本や欧米の国々のように、近代的なインテリゲンチアがいろんなものを書いて、それを出版メディアによって流通させるということがなかったわけです。つまり、近代国家における重要なメディアである出版メディアの発達がモンゴルで遅れていたことが、今でも口承文芸が大きな位置を占めるひとつの理由だと思います。それと関係するもうひとつの理由としては、出版メディアによる近代的な文学が発生していく過程において、モンゴルの文学者たちの中に口承文芸の遺産を近代文学に生かしていこうという考えが非常に強かったことが挙げられるでしょう。

口承文芸の理解のされ方というのは、近代の出版メディアとは違います。シジュールの「ラング」という概念がありますが、口承文芸における「言葉」は、彼の言うような意味の体系としての「言語」ではなく、声の質とか身振り手振り、その場の雰囲気やどんな人間が聞いているかといった、もっと身体的なパフォーマンスの形で理解されるものです。それが口承文芸の本来の理解のされ方だと思います。ところが従来のモンゴルの口承文芸の研究は、「文芸」という言葉にひかれて、書き取れたものを研究するという態度が主流でした。しかし、もっと身体的なパフォーマンス性といったことからモンゴルの口承文芸を研究することが必要だと私は思っています。そういったことを踏まえ、第3回は主に2つのことをお話したいと思います。

ひとつは家畜に対する「かけ声」を取り上げます。モンゴルの基本的な産業、生業と言いますと遊牧ですが、その遊牧生活の基本は人間と家畜との相互依存であるとも言えます。人間が家畜に介入する際、必ず声に伴い、声によって家畜をさまざまに操作します。このかけ声は、人間同士で交わされる分節言語の音声ではなく、家畜と人間のもっと生理的なレベルでのコミュニケーションの手段としてとらえられると思います。口承文芸というより口頭伝承といったほうが良いむしろ文化人類学の対象に近いものですが、先ほど述べたような理由から、今回特に取り上げることにしたいと思います。

もうひとつは、口承文芸の中の韻文を取り上げます。近代文学の一番大きなジャンルというのは小説ですが、小説というのは頭の中だけで読んで理解でき、またかなりの程度、他言語へ翻訳可能であると言われる。しかし、韻文というのは、翻訳はできますが、小説よりもリズムなど翻訳不可能な要素が多いのではないかと思います。資料5は、モンゴル口承文芸のジャンル分けの一例です。これは、モンゴル口承文芸の権威と言われているモンゴル人の学者ジャンジヤタビーン・ガーダムバ(1924~93)とダランタイン・ツェレンソドノム(1937~)が編集した『モンゴル口承文芸集』(1978)に掲載されており、モンゴルで広く一般化しているものです。この中の1.の「ことわざ・格言」から9.の「諷刺」までがすべて韻文のジャンルですから、モンゴル口承文芸における韻文の占める割合の大きさがお分かりいただけるのではないのでしょうか。その中から、ここでは生活や儀礼の各場面に密着した「まじない言葉」や「祝い言葉」、それに「祝詞」、モンゴル語で「ユールル」と言いますが、祝い言葉をもっと格式張ったものにしたこの「ユールル」と言われるジャンルについて

て、また対句などを利用した韻文の技法についてお話しして、モンゴルの韻文の巧妙さ、不思議さ、あるいはモンゴル口承文芸特有な韻文の技法による言葉の魔術的な側面というものに触れていただければと思います。

## 家畜への「かけ声 (Calling = コーリング)」のいろいろ

### 非言語的声による家畜とのコミュニケーション

遊牧というのは家畜と人間の依存関係で、人間が家畜に介入する時には声を伴うと述べましたが、そういった家畜へのかけ声を英語では「コーリング」と言います。これは最初にお話したとおり、普通は口承文芸に含まれません。なぜなら、これは文芸でもなく、さらにそこに使われている言葉は言語でもないからです。しかし、声というものを使って家畜とのコミュニケーションを図るという、遊牧民の持つひとつの文化的な体系であると考えられます。

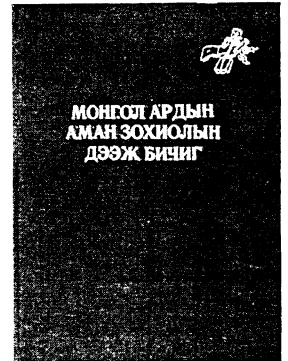
最初にモンゴルにおける遊牧の基本的な概念についてお話しするのが良いと思いますが、モンゴルでは家畜のことを「マル」と言います。一般にマルと言えば、馬、ラクダ、牛、羊、山羊を指し、この5種類の動物を特に「タババン・ホショー・マル(五畜)」と呼んで、モンゴルではこれが本来の意味での家畜になるわけです。この5種類の家畜というのは、群れを構成して自分たちで勝手に草を食べてくれるところが、犬や猫、豚や鶏と違うところです。

ですから、モンゴルの遊牧というのはマルの群を作る性質を利用して、囲いのない広い草地にたくさんの家畜を飼う牧畜形態であると言えます、こういった家畜の群れの操作というのが遊牧民の基本的な技術になるのです。つまり、野性の本能に対して、人間はかけ声というひとつの技術によって操作しようとするわけです。かけ声には次のようなものがあります。

### ■人間と家畜との距離を制御するためのかけ声

家畜である動物は野性の動物とはもちろん違うわけで、野性の動物よりずっと人間に近づいた存在になっています。しかし、遊牧は人間と家畜との依存関係のうえに成り立っているものの、その関係が近すぎても人間にとっては困ります。動物が群れをつくるというのは警戒本能のひとつの現れですから、犬や猫のように人間になつてしまうと群れをつくりません。また人間を恐れなくなると、人間が動物の群れの動きを好きな方向に追っていけなくなります。つまり統御できなくなるわけです。逆に、人間と家畜との距離が遠すぎても、野性動物のように警戒心が強すぎて人間の管理の届かない所にすぐ逃げて行ってしまいます。そこで、遊牧民はかけ声によって自分と家畜との適当な距離を作り出すわけです。

モンゴルでは、タババン・ホショー・マルと呼ばれる5種類の家畜それぞれに対して、(1)追う(人間から遠ざける)時と威嚇する時のかけ声、(2)呼び寄せる(人間に近づける)時と警戒心を解かせる時のかけ声が決まっており、地方差があるものの、主に用いられているかけ声は次のようにまとめられます。



Sh. ガーダムバとD. ツェレンソドノムが編集した『モンゴル口承文芸集』の表紙  
(出典：Sh. ガーダムバ、D. ツェレンソドノム編、『モンゴル ардын аман зохиолын дээж бичиг』, Улаанбаатар, 1978)



(1) 迫う(人間から遠ざける)時と 威嚇する時のかけ声  
 (2) 呼ぶ(人間に近づける)時と 警戒心を解かせる時のかけ声

羊	チョグ、チャー、チョー	ブルル(唇を震わす)
山羊	チョグ、チョー、シー	チュエグ、チー
馬	シー、チョフ	グリー
牛	ホーグ、ホッジ	オーウ
		(ヤク) ホール
ラクダ	ホーグ	トール

実際に声をかける時にはだいたい2回か3回ぐらい繰り返します。例えば、馬を呼ぶ時には「グリー、グリー」、あるいは「グリー、グリー、グリー」というふうに、牛を呼ぶ時には「オーウ、オーウ」、「オウ、オウ」、「オーウ、オウ、オウ、オウ」、ヤクの場合は「ホール、ホール、ホール」というように声をかけます。

この家畜と人間との距離の制御に関するもうひとつの系列、つまり呼び止める、あるいは人間に対する注意を喚起する呼び声もあります。これは、5つの家畜全部に共通して主に「ハイ」が使われ、「ハーイ」とか「ハーイ、ハイ、ハイ、ハイ」というように声をかけて呼び止めます。

#### ■馬の搾乳をする時のかけ声

ほかに人間が家畜の本能に介入する場面があります。例えば、馬の乳を搾るといってもそうです。本来なら母馬が子馬に乳を飲ませるところを、人間が乳を横取りすることなので、これは家畜に対する大変な介入と言えるわけです。その搾乳の際に、母馬に特定の声をかけることによって、出にくい乳を出しやすくするという特別なかけ声があります。

馬の搾乳でまず最初にする作業は、乳を搾る母馬そのものを捕まえるのではなく、「オールガ」と呼ばれる馬捕り竿で子馬を捕らえ、杭に張った「ゼル」

馬の搾乳をしているところ  
 (モンゴル国バヤンウルギー県ボルガン郡にて上村撮影、1996.6)



という縄につなげる作業です。子馬を捕まえる時、地方によっては馬捕り竿を使わずに、アメリカ西部のカウボーイのように投げ縄を使うこともあります。子馬がつかないでいれば母馬はその場所から離れないので、身体の大きな母馬をわざわざ捕まえても良いわけです。また、こうやって子馬を捕らえてつなぐと、将来乗る馬にした場合におとなしく乗りやすい馬ができ、しかも馬に寒さに対する耐久力がつくと言われてます。

初めて子馬を捕らえて縄につなげた日に、母馬の乳を搾るお祝いをします。まず、杭の所に「アルツ」という匂いの強い針葉樹の葉を燃やし、馬の乳を「ツァツァル」という道具で天に向かって撒いて、馬群の健康を祈ります。それが終わると近所の人たちを招いてお茶や食事を振る舞うのです。

馬の乳というのは、2時間過ぎると自然に母馬の乳房から流れ出てしまうので、2時間おきに搾ってやらなければいけません。朝10時から夕方6時ぐらいまでの間、毎日毎日2時間ごとに何回も搾らなければいけないので、非常に手間のかかる作業です。その搾乳のたびに母馬に声をかけますが、このかけ声だけでは乳を出してくれないので、少なくとも最初の2、3日は「催乳」と言って、まず子馬にちょっと母親の乳を飲ませたあとすぐに引き離して、人間が搾るといことをします。その時、気性の荒い母馬に蹴られないように足を縛ったりすることもあります。このように、搾乳の際に母馬にかけるかけ声は緊張状態にある母馬の緊張を解く役目を持っていると言えます。

#### ■子に授乳させない母畜に対する「子取らせ歌」

母畜の中には、自分の生んだ子畜に乳を吸わせようとしない母畜がいます。そのため、特別なコーリングや歌によって、自分の生んだ子に乳を吸わせるという本能を引き出す、つまり子供を受け入れるように促すというようなことをするわけです。

家畜の種類によってかけ声は違い、例えば羊の場合、母羊に対して「トイグ、トイグ」という特別なかけ声や、「ブルブル」という人間に対する警戒心を解かせるコーリングをして気を鎮めさせ、自分の子供に乳を吸わせるように仕向けます。このかけ声は、メロディーや歌詞を伴うことが多いので「子取らせ歌」と呼ばれています。

## 生活の場面で使われる「まじない言葉」と「祝い言葉(Benediction)」

以上のように、モンゴルの遊牧民は家畜に対して一定の声をかけることによって、いろいろな家畜の反応を引き出す文化的な体系を持っていると言えます。これとある意味でパラレルに考えることができるのが、「まじない言葉」と「祝い言葉」です。実は生活のあらゆる場面で今もよく使われていて、田舎はもちろん都会でも使用されます。これらは、それを言うことによってある現象を自分の都合の良いように操作しようとする、そういう意図を持って使用するものだと解釈して良いと思うのですが、言語になっているか否かの違いはあるものの、声によって現象を操作するという意味においては、家畜へのコーリングと共通する部分があるのではないかと思います。





まじない言葉と祝い言葉は重なっている表現がかなりあり、モンゴルで出されている口承文芸の本の中でも両方のジャンルに入っているものがいくつもあります。しかし、言語として見れば共通の表現でも、まじない言葉と祝い言葉には、用法・使い方でやはり傾向に違いがあります。まじない言葉というのは呪文ですから、つぶやくようにボンボンとささやくように発せられるのに対して、祝い言葉というのはそれをかける相手がいる、その相手にちゃんと聞こえるように、その人間とコミュニケーションが取れるような形で言われるという点が違うのです。祝い言葉では、言葉をかけられた相手が「ユール・シンゲック」とか「バト・オルシッフ・ボルトガイ」、つまり「あなたのかけた祝いの言葉、あるいは祈りの言葉どおりなれ」という意味の言葉を返すという決まりがありますから、現象を操作するという同じ意図が根底にあるとしても、相手が存在するひとつのコミュニケーション、あるいは挨拶になっていると言って良いのです。では、まじない言葉と祝い言葉の例を見ていきましょう。

■火の神様に捧げる言葉

モンゴルでは、ゲルの中の炉で火を焚いて暖をとったり料理をしたりしますが、炉の火の神様がいてと想定されており、炉ヤストーブの火がなかなかつかず煙ばかり出ている時には、気分を害している火の神様に捧げるという意味で、肉の脂身の部分やバターなどを火に捧げます。その時、「フグチ・フグチ/フッフ・ヤマニー・ウーフ・ウulgノー/オガルトツ・オガルトツ/オラーン・ヤマニー・ウーフ・ウulgノー/アッサ・アッサ/アラク・ヤマニー・ウーフ・ウulgノー/バツタル・バツタル/バルガナタイ・シャル・トス・ウulgノー」というまじない言葉をかけるのですが、この場合、火というひとつの現象は、「炉の火の神」という形で擬人化されているわけです。(日本語翻訳上村、以下同)

燃えさかれ、燃えさかれ	Хөгж хөгж
灰色山羊の脂身を捧げよう	Хөх ямааны өөх өргөнө
赤く燃え立て、赤く燃え立て	Улалз улалз
赤色山羊の脂身を捧げよう	Улаан ямааны өөх өргөнө
火よつけ、火よつけ	Ас ас
まだら山羊の脂身を捧げよう	Алаг ямааны өөх өргөнө
燃え立て、燃え立て	Бадар бадар
木に盛ったバターを捧げよう	Балганатай шар тос өргөнө

■子供に新しい洋服を着せる時の言葉

モンゴル人が着ている民族服のことをデールと言いますが、子供に新しく作ったデールを着せる時に、二重になっている前身頃の裾の内側と外側に乳脂を塗り付けて、「ドトード・ホルモイグン・トス・ウーフ・ミャラー/ガダード・ホルモイグン・ガンザガ・ソル・チメック/オルト・ホルモイグン・オナガ・ダーガ・ダガック/ホイト・ホルモイグン・ホニ・ホルガ・ダガック/エネ・ジル・ダーボー・ダーリンバル・ヒーブ/イレフ・ジル・トルゴ・ドルタンガール・ヒー/トース・ブー・ハルドウ」という言葉を発します。このまじない言葉を言うことで、新しいデールに仮託して子供の将来を祈るのです。

内側の裾を脂肪で聖別しろ  
 外側の裾を狩りの獲物を結ぶ皮ひもで飾れ  
 前の裾に1歳馬、2歳馬を従えよ  
 後ろの裾に羊、子羊を従えよ  
 今年は綿布で作った  
 来年は絹糸で作れ  
 土埃で汚すな

Дотоод хормойг нь тос өөх мялаа  
 Гадаад хормойг нь ганзага сур чимэг  
 Урд хормойг нь унага даага дагаг  
 Хойд хормойг нь хонь хурга дагаг  
 Энэ жил даавуу даалимбаар хийв  
 Ирэх жил торго дурдангаар хий  
 Тоос бүү халд

■旅の安全を祈る言葉

「火の神様に捧げる言葉」と「子供に新しい洋服を着せる時の言葉」は、今の若者は使わない、あまり一般的ではなくなったまじない言葉かもしれませんが、この旅の安全を祈るまじない言葉は一般的です。皆さんもご存じかもしれませんが、モンゴルを旅すると石が積み上げられているのを必ず見かけます。これを「オボー」と言うのですが、旅人はその石積みの脇を通る時には、乗物から降りて、オボーの上に新たな石を積んでその周囲を3回まわります。そうすることで道中の安全を祈るのです。その時に「オボーニー・イフ・タンダー/オルズニー・イフ・マンダー/ウリーン・イフ・タンダー/ウルズイーン・イフ・マンダー」とまじない言葉を発します。これは今の若い人でもよく使います。椎名誠氏の『白い馬』(1995)という映画でも、オボーに石を積んで道中の安全を祈るシーンで同じ言葉が使われていました。

オボーの大きさはあなたに  
 収穫の多きはわれらに  
 供物の多きはあなたに  
 幸せの多きはわれらに

Овооны их тандаа  
 Олзны их маньдаа  
 Өлийн их тандаа  
 Өлзийн их маньдаа



オボー  
 (モンゴル国バヤンウルギー県ボルガン郡にて上村撮影、1996.6)



フェルト作りの様子  
(モンゴル国ホブド県ドート郡にて上村撮影、1994)

### ■フェルトを作る時の言葉

これは牧畜の作業に関係したもので、フェルトを作っている時に「ホン・シク・ツァーガン／ドン・シク・ハトー／ホイグイ・ホルダン／サルヒグイ・サイハン・ポルトガイ」という言葉を発します。これは、まじない言葉と祝い言葉の両方に使うことができます。自分がフェルトを作る時はこれをつぶやくように言ってまじない言葉にし、誰かが作っているところに出合ったら、ひとつの挨拶のように、あるいは祝い言葉としてその作っている人たちにかけてあげるので。

フェルトというのは、ゲルの覆いや敷物にしたり何かと遊牧生活に不可欠なものなのですが、社会主義の時代にはフェルト工場ができて、一時期、牧民たちは工場製品ばかりを買って使っていました。そのため、ずっと自分たちでフェルトを作る機会がなかったのですが、また最近になって自分たちでフェルトを作り始めています。みなさんが夏から秋にかけてモンゴルの田舎に旅をする機会があったら、もしかするとフェルトを作っている場面に出合えるかもしれません。そういう時に、こういった祝い言葉をかけて差し上げれば、相手は非常に喜んでくれるでしょう。

白鳥のように白く	Хун шиг цагаан
ほら貝のように固く	Дун шиг хатуу
つむじ風なく速く	Хуйгүй хурдан
風なく美しくなれ	Салхигүй сайхан болтугай

### ■正月や断髪式で子供に言う祝福の言葉

子供の断髪式は、モンゴル人の人生の中で結婚式と並ぶ大きな通過儀礼です。モンゴルでは、昔は乳児期の死亡率がすごく高かったので、断髪式というのはそれを乗り越えてようやくひとりの人間になったと認めてもらうためのお祝いでした。このお祝いには、親類縁者を始めとし、地域の人々も集まります。子供は集まった客ひとりひとりから茶碗に入れた乳を飲ませてもらい、客は祝福の言葉を述べながら子供の髪の毛をひとつまみずつ切ってやり、お金や家畜などの贈り物を与えます。これらは親の財産と一緒になるということはなく、その子の財産としてずっと区別されます。ですから、子供はこの断髪式を境に経済的にも独立した人間として認められるわけです。それと同時に、食器洗いや自分の家畜の世話などの家の仕事、家計活動にも参加していくことになります。

普通、男の子は3歳か5歳、女の子なら偶数の2歳か4歳になると、この断髪式を行い、その時に子供に掛ける言葉は「オルト・ナスタイ／オダーン・ジャルガタイ／アープダー・アチタイ／エージター・トスタイ／トゥル・オスダー・トスタイ／トゥメン・オルニー・マンライ・ボルジ・ヤバーライ」というようにだいたいパターンが決まっています。周りの人たちは「祝いの言葉どおりなれ」という意味の言葉を唱和します。「子供に新しい洋服を着せる時の言葉」と同様、これも子供の将来を祈る言葉で、正月に子供から新年の挨拶をされた時にも使います。つまり今でも使われる生きた言葉で、非常に通用範囲の広いものです。子供の断髪式は、現在も田舎でも都市でも広く行われています。



子供の断髪式  
(モンゴル国ホブド県ムンフハイルハン郡にて上村撮影、1994)



長生きし	Урт настай
長く楽しみ	Удаан жаргалтай
父に孝行し	Аавдаа ачтай
母を助け	Ээждээ тустай
国に役立つ	Төр улсдаа тустай
多くの人の先頭となって行け	Түмэн олны манлай болж яваарай

### ■新婚を祝う言葉

また、新婚夫婦に出会った時には「デーベル・ダーフクイ・イデーテー／デルヒー・ダーフクイ・マッハタイ／ゾーン・ナスイーグ・ナサルジ／ゾルガータイ・タイギーグ・トルジ・ヤバーライ」という言葉をかけます。「食べ物に困らず、家畜も増えて、長生きをして行け」というような意味です。

屋根が支えられないほど食べ物があり	Дээвэр даахгүй идээтэй
大地が支えられないほど家畜を持ち	Дэлхий даахгүй малтай
百の齢を行き	Зуун насыг насалж
長寿の杖をつけて行け	Зургаадай таяг тулж яваарай

こういったまじない言葉・祝い言葉は、牧畜作業のいろんな場面に関するもののほかに、狩りに出かける時に、自分がまじない言葉として言う言葉、あるいは狩りに行く人にかけてあげる祝い言葉、それから、夏の間に牛の乳を醗酵・蒸留させて作る乳酒作りの場に出合った時に掛ける言葉というのがあります。また、相手が人間ではなく、競馬に出ようとしている馬に対しても祝い言葉・まじない言葉をかけることもあります。



## 魔法的な力を持つ「呪い言葉 (Malediction)」

もうひとつ、モンゴル語で「ハラール・ズフル」という「呪い言葉」があります。これは、ひそひそと小声で言われます。小声で言えば言うほど現象を操作する魔法的な力が強くなると信じられているからです。例えば次に挙げる呪い言葉というのは、非常に不吉で人々が嫌がることばかりを述べているわけです。

2歳馬をたてがみともども食え	Даагаа дэлтэй нь ид
福を招く儀礼の道具を矢ともどもなくせ	Далалгаа сумтай нь хая
種ラクダを首毛ともども食え	Буураа зогдортой нь ид
仏様(仏像)を絹布ともどもなくせ	Бурхнаа яндартай нь хая

これは、「ダーガ・デルテーン・イデ/ダラルガー・ソムタエン・ハイ/ポーラー・ゾグドルトエン・イデ/ボルハナー・ヤンダルトエン・ハイ」となります。ここに出てくる2歳馬というのは、もう少しの間育てばちゃんと乗れる馬にもなる大きさの馬で、そんな大事な2歳馬を食べてしまうというのは絶対にあり得ないことです。また、福を招く「ダララガ」という儀礼の道具があるのですが、それをなくしてしまうと福を招くことができないわけです。種ラクダというのもラクダを増やす時に必要なので、これを食べるなんてことは全くあり得ませんし、仏様を捨ててなくしてしまうということも、仏教徒のモンゴル人にはあり得ないわけです。

つまり、呪い言葉というのは、人々が一番嫌がるようなこういった言葉を韻文の形でささやくように言うものなのです。モンゴルの北方にフスグルという土地がありますが、この辺りにはまだシャーマンがいて、力の強いシャーマンが呪い言葉を発すると、今でも本当に人が死んでしまうということもあるそうです。

## 即興的に語られる《ユルール》(祝詞)

まじない言葉、祝い言葉、呪い言葉というのはさまざまな場面で出てくる言葉ですが、それをもっと長くして格式張った表現にしたものが《ユルール》(祝詞)。だと言うことができます。これは、いろいろな儀礼の時に使われ、その場の雰囲気や新しい要素というものも取り入れて即興的に語ることで誰でもができるわけではないのですが、地域社会にひとりか2人ぐらいユルールを語るのが得意な人が必ずいて《ユルールチ》と呼ばれています。

ここで、少し長いですが、モンゴル語で「ダーヒニー・ユルール」と言われる「子供の断髪式の祝詞」の一例をご紹介します。

## ■子供の断髪式の祝詞

私に賜る飲み物と言えば  
アルヒ(酒)という名の清らかな性質の  
サルハドという名の素晴らしい性質の  
ダルスという名の変わらぬ性質の  
飲み物の中の賜り物を  
泉の源より湧き出て流れる  
湧出の聖水で蒸留し  
最初の水を3杯熱くし  
最後の水を5杯熱くし  
チングスの代の堅牢な瓶に注ぎ入れ  
金の縁取り銀の内張りの  
糸衫の杯に  
なみなみ満たし  
こちら側には尊い柄の  
あちら側にも品ある柄の  
ナムグルという名の  
8つの仏法の文様を持つ  
尊きハダグ(儀礼用の絹布)を捧げ持ち  
私に祝いの言葉を述べよという。  
親愛なるこの家では  
6つの根本の暦を鑑み  
寺から来た占星術師に占わせ  
よろずの吉祥の成った  
あまねき年の平安の日に  
親愛なる息子の  
金のような黄色の毛を切ろうとするそのわけは  
相性のよい干支の人を  
丁重にお招きし  
親愛なる多くの人々に  
予告して  
鋼の白きはさみと  
貫くような白きナイフを用意し  
金のはさみの口を開き  
人生の安全を祈願し  
銀のはさみの口を開き  
永遠の寿命を祈願し  
鋼の突起の金の握りのはさみを  
すべてのかたがたのお手元にめぐらせ切らせ給い  
生まれ出た命の福を  
長く広げ  
右側のこめかみから

## Дахины ерөөл

Над хайрлаж байгаа идээ нь болбол  
Архи нэртэй аригун чанартай  
Сархад нэртэй сайхан чанартай  
Дарс нэртэй дагнасан чанартай  
Идэнийхээ хишгийг  
Шанд булгийн эхнээс оргилон урссан  
Ундармал аршаанаар нэрж гаргаад  
Эхний усыг гурав халаагаад  
Эцсийн усыг тав халаагаад  
Чингисийн үеийн чин бат лонхонд сөгнөөд  
Алтан амсартай мөнгөн дотортой  
Агар завьяа хундганд нь  
Амсар тэгш мэлмэлзүүлж  
Наанаа нанжин хээтэй  
Цаанаа чамин хээтэй  
Намгүр нэртэй  
Найман тахилтай  
Нанжин их хадгаа барил  
Намайг ерөө гэлээ,  
Эрхэм хайрт танайх болбол  
Зургаан үндсэн хунлинд үзээд  
Зуугаас ирсэн зурхайчид үзүүлээд  
Түмэн өлзий бүрдэгсэн  
Түгээмэл жилийн түвшин сайн өдөр  
Эрхэм хайртай хүүгийнхээ  
Алтан хонгор дахийг үргээж байгаа учир болбол  
Ивээл жилтэй хүнийг  
Эрхлэн залж  
Эрхэм олон түмнээ  
Урьдчилан хэлж  
Ган цагаан хайч  
Гавшгай цагаан тонгоргийг бэлдээд  
Алтан хайчны амыг нээж  
Амь насы нь даатгаж  
Мөнгөн хайчны амыг нээж  
Мөнх насы нь даатгаж  
Ган хошуутай алтан бариултай хайчаа  
Гар мутар бүхийдээ дамжуулан үргээж  
Гарсан төрсөн нас буяны нь  
Ургатгаж өргөөд  
Баруун талын шанаанаас нь

切り始めれば  
 蓮華の花開く如く  
 左側のこめかみから切り取れば  
 あらゆる学徳が光を発するが如く  
 頭頂から切り取れば  
 知性が研ぎ澄まされ  
 知恵が増すが如く  
 うなじから切り取れば  
 偉大全能の  
 靈気が増すが如く  
 親愛なるこの子の  
 父の才知はといえは  
 書物に明るく眠りは浅く  
 手先が器用で口が巧み  
 法に忠実、裏に機転  
 戦に勇士、海に泳ぎの名手  
 火には近づかず、意気消沈することのない  
 身内の者と和気あいあい  
 親類とわけへだてなく  
 この地の中心に構え  
 家畜は多く  
 平穏な素晴らしき母国に  
 子孫繁栄  
 その数をしらず  
 去勢馬の数を知らぬほど豊か  
 名声高く祈願成就し  
 子供は育ち福は広がり  
 結婚吉縁、よく学び  
 よく遊び、よく楽しみ  
 寿命は長く  
 楽しみ多く  
 いつも仏の教えに従い  
 祝い事の先頭に  
 御仏たちに  
 一心に赦しを請う  
 尊き祈りを捧げ述べよう！

Эхлэж үргээхэд  
 Бадам лянхуан цэцэг дэлгэрч байгаа мэт  
 Зүүн талын шанаанаас нь авч үргээхэд  
 Зүйл бүрийн эрдэм цацарч байгаа мэт  
 Орой дээрээс нь авч үргээхэд  
 Ой билэг нь хурцдаж  
 Оюу ухаан нь нэмэгдэж байгаа мэт  
 Ар шилэн дээрээс нь авч үргээхэд  
 Агуу их хүчин төгөлдөр  
 Атаа хүчин нэмэгдэж байгаа мэт  
 Эрхэм хайртай хонгор хүүгийн  
 Эцгийн билгийг ярихад  
 Номд мэргэн, нойронд сэргэг  
 Үйлэнд уран үгэнд цэцэн  
 Хуулнд шудрага хурминд цовоо  
 Дайнд баатар далайд усч  
 Галд халдаггүй галавт шантардаггүй  
 Элгээрээ энх сайхан жаргаж  
 Төрлөөрөө төв сайхан оршиж  
 Төв их нутгийнхаа дунд оршиж  
 Мал сүргээрээ олон  
 Түвшин сайхан орондоо  
 Өнөр үүлдрээр баян  
 Үрээ танихгүй олон  
 Үрээгээ танихгүй баян  
 Яруу алдар есөн хүсэл  
 Өсөх нас өрнөх буян  
 Суух заяа сурах эрдэм  
 Баярлах наадам бахтай жаргал  
 Нас сүүдрээр урт  
 Найр цэнгэлээр их  
 Эгүүрд номын ёсоор  
 Баярын магнайгаар  
 Балдан Лхам, баатар дагинасуудаа  
 Алгасал үгүй эргэж өршөөхийн  
 Бэлэг ерөөлийг дэвшүүлэн өргөж айлтгая!

Тайлбар  
 Хуучин Говь-Алтай аймаг Наран сумын  
 харьяат, эдүгээ Хэнтий аймгийн Цэнхэрмандал суман дахь Улсын  
 асрамж тэтгэврийн газар байгаа Хандмаа овогтой Дүгэржаваас 1964  
 онд тэмдэглэж авсан юм.  
 (出典：Ш. Гадамба, Д. Цэрэнсодном, 《Монгол ардын аман зохиолын  
 дээж бичиг》, Улаанбаатар, 1978)

## 洗練された韻文の技法

モンゴルでは、このような韻文のジャンルは、日本人からは想像もできないような高い評価を持っており、例えば近代文学にしても散文を書く小説家より韻文を書く詩人のほうがずっと評価が高いわけです。モンゴルでは詩人のコンテストが盛んに行われるのですが、そのコンテストも、詩人が自分の作った詩を聴衆の前で読むという形で行われます。つまり、韻文というのは散文より評価が高いというだけでなく、声に出して朗読するというパフォーマンスの形をとる前提で作られるわけで、その技法も洗練されています。そこで、最後にその韻文の技法を見ていきたいと思います。

### 基本は頭韻、脚韻、パラレル

韻文の技法には、主に次の2つがあります。

1. 行内部の頭韻(alliteration)
2. 2つの行、または2つの行のグループ間の音声的・意味的パラレル(parallelism)
  - (1) 音声的な、行頭の頭韻(initial rhyme)・脚韻(rhyme)・行全体のパターンへの繰り返し(\*1も行の区切りを変えるとここに含まれる可能性があります)
  - (2) 意味的な、行の中の同じ位置にある語の、同義語・類義語・反意語による置き換え

それぞれの韻文の中にはさらに多様な細かい技法が出てきますが、主に上に挙げた頭韻、脚韻、パラレルといった技法で作られています。パラレルというのは対句と考えていただいてもよろしいでしょう。今まで見てきましたまじない言葉や祝い言葉の中にも、こういった技法がふんだんに使われています。

では、1.の技法について、先ほど紹介した「子供に新しい洋服を着せる時の言葉」(p.42・43参照)を例に取って見てみましょう。1行目は「ドトード」「トス」と、この行の強拍のくる語頭の音の「ド」と「ト」が頭韻を踏んでおり、2行目でも「ガガード」と「ガンザガ」という箇所「ガ」という同じ音声が使われていて、頭韻を踏んでいるわけです。同様に3行目、4行目でも「オルト」と「オナガ」、「ホイト」と「ホニ」という箇所が頭韻を踏んでいます。

技法の2.は少し分かりにくいかもしれませんが、これもモンゴルの韻文の基本的な技法で、ほとんど全部に使われています。例として、まじない言葉の最初に紹介した「火の神様に捧げる言葉」(p.42参照)を見てみます。まず1行目と2行目の頭「フグチ」と「フツフ」の「フ」、次に3行目と4行目も同じように「オガルツ」と「オダーン」の「オ」という音で頭韻を踏んでいます。5行目と6行目、7行目と8行目もやはり頭韻を踏んでいます。これはまた、このように頭韻を踏んだ2つの行でワンセットになっており、その構造が1行目と2行目のワンセット、3行目と4行目のワンセットというように4回繰り返されていて、意味的にもやはり2行で1組のパターンになっているわけです。また、最後の8行目だけは違いますが、2行目、4行目、6行目には「ヤマニー・ウーフ・ウルグノー」という繰り返しが用いられています。

「子供に新しい洋服を着せる時の言葉」(p.42・43参照)にも同じようにいろ







いろいろな技法が使われており、行の内部の頭韻だけでなく、まず、1行目と2行目の「ドトード」と「ガタード」は「内側」と「外側」という意味的な対立でもって対句を作っています。また、音声的にもこの2つの行というのはパターンが類似していると言えます。3行目と4行目もやはり「オルト」と「ホイト」で、「前」と「後ろ」という対立する意味によって対句をなしています。後半も「今年」と「来年」、「綿の布」と「絹の布」というように、それぞれが意味的な対立の対句になっています。なおかつ、1行目と2行目、3行目と4行目が2行ずつでひとつのセットになっていて、そのセットが「内側と外側という対比」と「前と後ろという対比」というパラレルになっている、という複雑な構造を持っているわけです。

このように見ていくと、先ほど紹介したそれぞれの言葉にはみんな基本的な2つの技法のうち、何かしらの技法が用いられていることがお分かりいただけるとと思います。

「旅の安全を祈る言葉」(p.43参照)も頭韻を踏んでいますし、行の音声的なパターンというのも同じです。また、「タンダー」「マンダー」「タンダー」「マンダー」という行の最後が全部脚韻を踏んでおり、1行目と2行目のセットが3行目と4行目のセットに意味的かつ音声的に類似反復しているという構造になっています。

「フェルトを作る時の言葉」(p.44参照)では、厳密な意味での頭韻ではありませんが、2行ずつで母音の構造がかなり類似しており、それが対句を作る基礎になっています。

「正月や断髪式で子供に言う祝福の言葉」(p.44・45参照)も、1行目と2行目の「オルト」と「オダーン」で頭韻を踏んでいますし、これは両方とも「長い」という意味で、やはり意味的な類語の反復でもあるわけです。また各行の最後は脚韻を踏んでいます。

「新婚を祝う言葉」(p.45参照)も2行ずつ頭韻を踏んでいて、1行目と2行目、あるいは3行目と4行目の音声的なパターンがパラレルになっています。

また、「子供の断髪式の祝詞」(p.47・48参照)の中にもこのような韻文の技法がふんだんに使われています。訳詞で言うと最初の部分は「私に賜る飲み物と言えは／アルビという名の清らかな性質の／サルハドという名の素晴らしい性質の／ダルスという名の変わらぬ性質の」となっていますが、ここに出てくる「アルビ」「サルハド」「ダルス」というのはすべて同一のもの、つまり「酒」を指しています。こういった行の音声的なひとつのパターンの中で、類似する言葉を入れ替えながら祝詞を作っていくというのも詩の技巧のひとつです。

以上見たように、よく使われる単純なまじない言葉や祝い言葉でも、韻文として非常に完成度の高いものになっています。このような韻文としての完成度の高さというのが、まじない、あるいは祝いの有効性、つまり現象を操作する魔法的な言葉の力を裏付けているのではないかとと言えます。現代の詩人たちは、ヨーロッパなどの詩の影響を受けてはいますが、彼らが詩を作る時にも基本的にこういったまじない言葉や祝い言葉と同様の技法を使っているのです。

## 第4章 モンゴル口承文芸(2) 語り継がれる英雄叙事詩

講師＝上村 明



この回では、モンゴルの口承文芸の中で最も重要なジャンルと言われている《英雄叙事詩》についてお話したいと思います。英雄叙事詩は、その名のとおり、英雄の生い立ちや英雄の英雄たる所以である敵を倒すという英雄物語を、詩、つまり韻文の形で語ったものです。英雄叙事詩も初めから書かれたものではなく、パフォーマンスによって表現される形式を取ります。基本的なストーリーは、モンゴルのどの地域のものでもだいたい共通しているのに対して、その語り方やメロディーには地域差がかなりあります。

## モンゴル英雄叙事詩とは

### 地域・民族によって異なる英雄叙事詩という言葉

まず、英雄叙事詩という用語についてですが、一般にモンゴル国では英雄叙事詩のことを「バートルラック・トーリ (баатарлаг түүл)」と言っています。これはロシア語の「ゲロイチェスキー・エポス (героический эпос)」、あるいは英語の「ヒロイック・エピック (heroic epic)」を翻訳したもので、もともと学術用語として作られた言葉です。

実は、英雄叙事詩を表す言葉は地域・民族によって違います。バートルラック・トーリの「バートル」というのは「英雄・勇士」という意味ですが、西モンゴルのオイラド人はこの英雄叙事詩のことを単に「トーリ」と言い、ボルガ河辺りに住むカルムイク人の中では「オットゥ・トーリ」と言っています。カルムイク人の「トーリ」という言葉は単に「お話(民話)」という意味に使われていて、「オットゥ」というのは「長い」という意味ですから、つまりは「長いお話」というふうに使われているわけです。実際、語り終えるのに何日もかかる長大な英雄叙事詩がいくつもあります。モンゴル国の多数派を占めるエスニック集団であるハルハ人(ハルハ・モンゴル人)や、ロシアのバイカル湖周辺からモンゴル国の北に住むブリヤート人の中では「ウリゲル」、または「オルト・ウリゲル」と言われています。「長い」と言う意味の言葉が、ここでは「オルト」となり、また「ウリゲル」はモンゴル口承文芸のジャンルの用語では「民話」にあたる言葉ですから、「オルト・ウリゲル」は、「オットゥ・トーリ」と同じく「長いお話」という意味になります。中国の内モンゴルでもやはり「ウリゲル」と言われ、「ホーリン・ウリゲル」と言われることもあります。「ホーリン」は「馬頭琴などの弦楽器」のことですから、これは「弦楽器で語るお話」という意味になります。内モンゴルでは一般の民話を「ヤブガン・ウリゲル」、つまり「短い(あるいは普通のお話)」と呼んで区別しています。

### 物語の基本的な2つのモチーフ「奪回」と「求婚」

次に、英雄叙事詩のストーリーはどんな展開なのかということについてお話したいと思います。モンゴル国の口承文芸の研究者ラドナーバザリーン・ナラントヤ(195?~)は、270ほどの英雄叙事詩の名前をリストに挙げていますが、プロット、つまりストーリー運びの基本的なモチーフは2つです。

ひとつは「奪回」モチーフです。この「奪回」という訳し方が適当かどうか分かりませんが、「主人公が、敵に妻や財産を奪い取られて、あるいは奪い取りに来たのを迎え撃ち、敵に打ち勝って、奪い取られていた妻と財産、あるいは

敵の財産を奪って故郷に戻り、宴を開く」というものです。これが「奪回」のモチーフといわれる叙事詩の基本的な物語展開です。私たちのよく知っている日本のお話で言えば「桃太郎」と同じようなストーリーで、桃太郎が鬼ヶ島に鬼退治に行って、鬼ヶ島の宝物を持ち帰ってめでたしめでたしというのとよく似たモチーフです。

もうひとつは「求婚」モチーフと言われるもので、これは「妻を娶りに故郷を出発した主人公が、男の3つの競技で勝利し、妻とその父の財産を得て故郷に帰り、宴会を開いて、めでたしめでたし」となるものです。「男の3つの競技」というのは「エリーン・ゴルバン・ナーダム」と言って、革命記念日に開かれるナーダムで行われる競技と同じもので、弓矢、相撲、競馬の3種類の競技を言います。

この2つをいろんなふうを組み合わせてさまざまなストーリーができあがっているのですが、基本的なモチーフはこの2つしかありません。その組み合わせで最も多いのが、最初に「求婚」モチーフがきて、次に「奪回」モチーフがくるという展開の英雄叙事詩です。その場合、主人公が妻を娶りに故郷を出て行き、その留守に敵が攻めてきて主人公の財産を奪い取ってしまい、エリーン・ゴルバン・ナーダムに勝利してお嫁さんを連れ帰った主人公は、それを取り戻すために2番目の「奪回」モチーフが始まる、という展開になるわけです。代表的な英雄叙事詩は「13歳のアルタイ・スンベフー」です。

また「奪回」モチーフが2つ繋がっている場合もあります。初めの敵が攻めて来て、それを事前に知った主人公が敵を迎え打ち、あるいは主人公が敵の陣地まで乗り込んで行って戦いに勝利し、敵の財産その他を奪って戻って来る。その間に、次の敵が主人公の土地に来て、主人公の財産や妻を奪い取ってしまう。故郷に戻った主人公がそれを知り、2番目の「奪回」モチーフが始まる、という繋がれ方の英雄叙事詩もたくさんあります。『3歳のゴナン・オラーン・バートル』という英雄叙事詩が代表的です。

こういった形で基本的なモチーフをいろいろな形で繋ぎ合わせて叙事詩ができていますが、話の骨格はこの「奪回」と「求婚」という2つのモチーフが占めているのです。

### パターン化されている登場人物

英雄叙事詩では、プロットと同じく登場人物もパターン化されています。まず、英雄を主人公として、その主人公の妻がいます。そして、英雄的な行為である戦闘や競技の相手となる敵がいます。それから主人公の乗る馬がいます。この馬は人間の言葉をしゃべることができ、主人公を助ける助手的役割も果たします。求婚モチーフの場合も、最初は妻がいませんが途中で登場しますから、主な登場人物は、主人公、その妻、主人公の乗る馬、敵、ということになります。

敵には2種類あり、ひとつは主人公の好敵手となる英雄、それと「マンガス」という貪欲な化け物です。ふつう恐ろしい形相をしています、人間の姿を取ることもあります。マンガスはどんな存在かと言いますと、非常に貪欲で、人間や家畜などをどんどん飲み込んでしまう、ひとつの死のイメージと言えます。主人公の英雄は、マンガスの大きく腹れあがった腹を断ち割って、



ラドナーバザリーン・ナラントヤ  
Раднаабазарын Нарантуяа (右)と「モンゴル口承文芸集」の編者ダランタイン・ツェレンソンドノム・Далантайн Цэрэнсодном (左)  
(上村撮影、1997)



飲み込まれていた人々や家畜を解放します。これはまた、マンガスが、日照時間の短い暗くて長期におよぶモンゴルの冬も象徴していて、英雄はこの冬からの解放を成し遂げるのだと考えられます。このような神話的要素はシベリア諸民族の英雄物語と共通していますが、歴史上実在した英雄が主人公になることの多い西ユーラシアの英雄叙事詩とは異なる点です。

最後には主人公が敵をやっつけて、めでたしめでたしとなるのですが、このように基本的な登場人物のパターンも決まっており、基本的な話の要素も数が限られているにもかかわらず、これら限定されたエレメントを組み合わせることで作られる英雄叙事詩のストーリーは、実に多彩なものになっています。

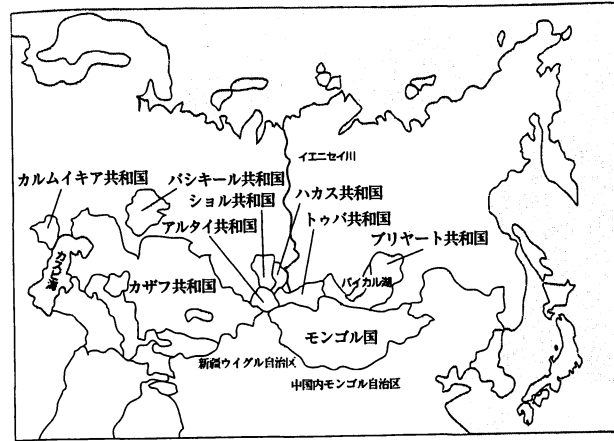
### 英雄叙事詩の語り手

では、英雄叙事詩の語り手とはどんな人々なのでしょう。モンゴル学の有名な学者ニコラス・ボッベ(1897~1991)は、宮廷や領主のお抱えのような形でプロフェッショナルな語り手がいたと述べているのですが、完全にプロフェッショナルな伝統的な語り手というのは現在いませんし、昔もいなかったのではないかと思います。なぜならば、英雄叙事詩の伝統的な語り手たちは、天から与えられた自分の能力を発揮するのであって、それに対して報酬を求めてはならないと考えていたからです。また、語り手たちは、普段は一般の牧民と同じく牧畜の作業をしており、家に招待されてパートタイム的な形で叙事詩を語っていました。もちろん、劇場付属の職業音楽家のプロとしての語り手は現在いますが、彼らが語る英雄叙事詩は、ある種近代的な位置付けを与えられ、舞台芸術化された語りと言えます。そこには、あとで述べる伝統的な語り手による信仰と結び付いた本来の語りの意味は失われてしまっていると言っているのです。

## モンゴル英雄叙事詩の地域的分布とその語られ方

モンゴル国ではバートルラック・トオリ、日本では英雄叙事詩とひとつの用語でくられていますが、英雄叙事詩を指すももとの言葉は地域や民族によって異なることは最初に述べたとおりです。その語られ方も地方地方によって違いが見られ、例えば、ハルハ人やブリヤート人の住む地方ではもう韻文として語られることはなくて、民話のように散文で語られる場合がほとんどです。研究者によってはこれらを英雄叙事詩に含めないという人もいますが、そういったものも含めて英雄叙事詩と言っているのが今のところ一般的です。また、モンゴル系の人々の住んでいる場所(図3)は現在のモンゴル国に限らず、ロシア連邦のカルムイクア共和国、ブリヤート共和国、中国内モンゴル自治区など広い範囲にわたっていますので、それぞれの地域で、これこそが英雄叙事詩だとされる代表的英雄叙事詩も異なっています。

では、地域・民族による英雄叙事詩の語られ方の違いを見ていきましょう。



### ■ブリヤート人

まず、ロシアのバイカル湖周辺からモンゴル国の北部にわたって住んでいるブリヤート人の中では、叙事詩と言えども『ゲセル・ハーン物語』、あるいは単に『ゲセル』と呼ばれる英雄叙事詩の名が挙げられます。第2回の近世文学のところで出てきたように、この物語はチベット起源の叙事詩、あるいは説話と言っても良いと思いますが、ブリヤートに入って口承で伝えられている『ゲセル・ハーン物語』は、ももとのチベット起源の内容に、神話的な要素がかなり入っています。

### ■ハルハ人(ハルハ・モンゴル人)

ハルハ人というのは、モンゴル国の主要なエスニックグループです。そこで語られている代表的叙事詩の例を挙げるとすれば、『アギーン・オラーン・ハーン』とか、『3歳のゴナン・オラーン・バートル』、『ヒリン・ガルゾー・バートル』になるでしょう。ちなみに、これら英雄叙事詩の名前は「~ハーン」とか「~英雄」というのがほとんどで、そこに登場する主人公の名前と一応考えていただいで結構です。

ハルハでは、もう英雄叙事詩を韻文で語れる人がなくなってしまったと言われているので、先ほど述べたように、たいい民話と同じように散文で語られます。ところどころハイライトの部分だけに決まり文句の韻文が登場します。また、伴奏なしで語られることがほとんどです。それに対し、日本でも絵本として出版されている『スーホーの白い馬』のハルハ版『フフー・ナムジ』などの民話は、馬頭琴の弾き語りでも語られることもあります。

### ■内モンゴル(中国内モンゴル自治区)に住むモンゴル人

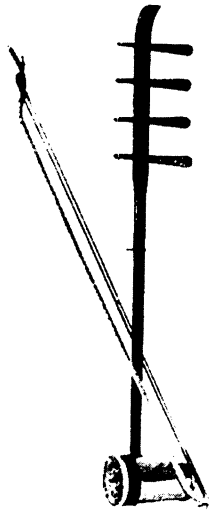
一方、内モンゴルでは、また少し特殊な語り方をします。語られる物語には、ブリヤートと同じ『ゲセル・ハーン物語』や『フレルバートル・フー』といった英雄叙事詩があり、モンゴル語では「ドゥルブン・チヘ・ホール」または「ホーテル」と言いますが、4本の弦を弓で弾く「四胡」という弦楽器を使って弾き



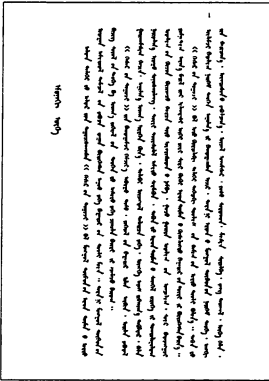
図3  
第4章に関係する人々が居住する国と地域



1989年にブリヤートのウラン・ウデで出版された『ゲセル・ハーン物語』の研究書『モンゴル・ゲセル物語』の表紙  
(出典：M. П. Хомонов, 《Монгольская Гэсэриада》, Улан-Удэ, 1989)



バージェイ Pajai (上)  
 モーオヒン Maruökin. 手にしているのが四胡(右)  
 四胡(ドルブun・チヘ・ホール、またはホーテル)(下)  
 (出典：G. Kara, 《Chants d'un Barde Mongol》, Akadémiai Kiadó, Budapest, 1970)



モンゴル文字で書かれているバージェイの『ゲセル物語』の表紙と前書き  
 (出典：『ゲセル物語』、内蒙古社会科学院文学研究所編、1985)



ドルブun・チヘ・ホールを背負っている放浪の吟遊詩人(ハズルンド・クリスチャンセン撮影)  
 (出典：Collected by Henning Haslund-Chreitensen, 《The music of the Mongols》, Da Capo Press, New York, 1971)



語りをします。語り手には、バージェイ(1902~62)とモーオヒン(1906~19?)という有名な2人がいます。バージェイの語りのひとつは、内モンゴルで1985年に『ゲセル物語』という名前で、また、モーオヒンの『フレルバートル・フー』は1961年にモンゴル国で同名の書籍として、それぞれ出版されています。

この2人に代表される内モンゴルの語り手たちはホーテルを伴って英雄叙事詩を語るだけではなく、ほかのいろんなジャンル、例えば即興の祝い言葉「祝詞」や称え言葉「讃詞」(モンゴル語で「マグタール」)も、このホーテルで即興的な弾き語りを演じます。つまり、彼らはさまざまな口承文芸のジャンルをひとりでこなすわけで、その中のひとつがこういった英雄叙事詩の語りであるということです。これらの語り手たちの語り口で特徴的な点と言えば、英雄の姿形、馬の描写や戦闘のシーンなど場面によってメロディーを使い分けるということが挙げられます。時々伴奏を中断して、台詞語りで英雄たちのやりとりをひとり2役で演じたりするので、非常に演劇性の高い語り方と言えます。日本では1991年にキングレコードから『草原の叙事詩—モンゴルの「ジャンガル物語」』(ワールド・ミュージック・ライブラリー36)というCDが出ていますが、その中の『ジャンガル』にこの内モンゴルの語り方の例を聞くことができます。

また、近世文学でも出てきた《ベンセン(あるいはベンスニー)・ウリゲル》(中国起源の語り物)も、このように語られていたと考えられます。19世紀から20世紀の初めにかけては、内モンゴルだけでなく、フレ(今のウランバートル)にもこのような語り手がたくさんいて、中国の『水滸伝』や『三国志』を翻案した物語を、モンゴルの英雄叙事詩を語るのと同じスタイルで語っていたと言われています。この語り方のスタイルは、日本の講談に似た、中国の『説書』と言われる大道芸の影響もあると考えられます。内モンゴルではこういった伝統があるほか、『アギーン・オラーン・ハーン』や『3歳のゴナン・オラーン・バートル』といった物語も、ハルハと同じように伴奏なしで語られています。

#### 英雄叙事詩のメッカ西モンゴル

##### ■西モンゴルのオイラド人

実は、英雄叙事詩のメッカというか、今でも代々続いている伝統的な語り手がいるのは、西モンゴルです。西モンゴルといっても広いですが、モンゴル国の西部から中国の新疆を含めた地域を指し、そこに住むモンゴル系の人々を西モンゴル人、あるいはオイラド人と呼びます。

##### (1)カラムイク人(ロシア連邦のカラムイク共和国に住むモンゴル系民族)

その中のまずカラムイク人ですが、彼らは17世紀前半に今の新疆からカスピ海北西のボルガ河方面に移っていった集団で、西モンゴルのオイラド人たちの一部と言って良い人々です。

彼らの間でどういふ叙事詩が語られてきたかと言いますと、『ジャンガル物語』という、これも近世文学で出てきたかと思いますが、モンゴル二大叙事詩のひとつである英雄叙事詩で、これは現在も語られています。「ドンブラ」というカザフでも使われている弦楽器を使うこともありますし、楽器なしで語る場

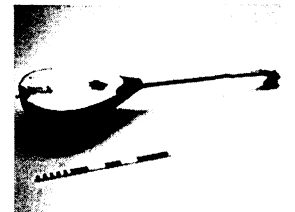


ХҮРЭЛБААТАР  
 ХҮҮ

#### ХҮРЭЛБААТАР ХҮҮ



キリル文字で書かれているモーオヒンの『フレルバートル・フー』の表紙  
 (出典：Муу Охин, 《Хүрэлбаатар хүү》, Улаанбаатар, 1961)



西カザフのドンブラ。カラムイクのドンブラとはやや形状が異なる  
 (出典：『東京芸術大学音楽学部小泉文夫記念資料室所蔵楽器目録』, 1987)



合もあります。「ジャンガル物語」の語り手を《ジャンガルチ》と呼びますが、代表的なジャンガルチには、古いところでエーリヤン・オブラー(1857～1920)、現在ではオクナ・ツァガンザム(1957～)といった優れた語り手があります。ツァガンザムの語りは、低い声の語りから「ホーミー」(p.64参照)に移行するという箇所がかなりみられます。この独特な低い声の語り、あとで述べるアルタイ・オリアンハイの人々の間にも見られます。また、英雄叙事詩の一節を語ってはホーミーを入れるという彼の語り方は、アルタイ・オリアンハイでも古くは見られたということですが、現在のモンゴル人の中ではこのツァガンザムだけです。彼の場合、トゥバ地方やモンゴル国でホーミーを学んだということなので、それを取り入れてこの形を独自に作り上げた可能性もあります。

### (2) 新疆ウイグル自治区に居住するモンゴル系の人々(トルゴード人ほか)

新疆ウイグル自治区には45万人以上のモンゴル系の人々が住っていますが、その中のトルゴード人の間でもやはり「ジャンガル物語」が中心です。この地方では、伴奏なしで語る語り手が多いのですが、内モンゴルと同じように四胡



エーリヤン・オブラー Ээлян Овла (ロシアのモンゴル学者 V. L. コトウィチ撮影、1910)  
(出典：У. Загдсүрэн編, 《Монгол ардын баатарлаг туульсын учир》, Улаанбаатар, 1966)



シャルフギーン・プルブジャブ  
Siraküü-yin Pürbūjab  
(出典：『后明皇(1988年第8期)』新疆人民出版社, 1988)



マンディハニー・バルチン Мандиханы Парчин.  
手にしているのはバヤドのトブショール(Ü. ヤダムスレン画)  
(出典：У. Загдсүрэн編, 《Монгол ардын баатарлаг туульсын учир》, Улаанбаатар, 1966)



オクナ・ツァガンザム  
Окна Цаган Зам  
(出典：《Chants Épiques et Diphoniques Touva, Chor, Kalmouk, Tadjik vol. 1》, Maison des Cultures du Monde, 1990)

左がジャビーン・ゾーナイ Jab-un Jarunai.  
右も有名なジャンガルチのひとり、ペルレイン・ランビル Perle-yin Rampil  
(「ジャンガル学会」での「ジャンガル」演劇会にて上村撮影, 1988)



の伴奏で語る人もいます。例えば、ジャビーン・ゾーナイ(1924～)という語り手がそうです。彼は代々語り手の家系の生まれで、四胡を伴奏に使っていますが、こういった楽器を使って語れる人は現在非常に少なくなっていて、今ではこのゾーナイ氏だけのようです。ほかの語り手は伴奏なしで語り、その節やメロディーは語り手それぞれで微妙に違います(資料7)。

また、新疆のボルタラ地区に住むチャハル・シネ・アングという集団には、シャルフギーン・プルブジャブ(1923～)という、今も聞き手に大変人気のある語り手があります。インタラクティブな形と言いますが、聴衆も彼の滑稽なしぐさに爆笑するだけでなく、主人公のジャンガルになりきった彼に酒を勧めたりします。聴衆からそのような反応を得られる生きた語りができる人は、新疆では彼以外になくなってしまいました。

1988年に「ジャンガル学会」という学術会議が新疆のウルムチで開かれましたが、そのプログラムのひとつとして「ジャンガル」の演劇会が新疆ハル・オス(烏蘇)県のサルヒトという所で行われました。国際学会に付属してお祭を開催し、一般の人々の伝統芸能への関心を高めようという目的で、新疆中の有名な語り手たちをみんな集めて語らせたのです。最近、このような試みは、モンゴル国を始め各地で行われるようになってきました。各地の語り手たちが数少なくなり、現役の語り手もみな高齢になっているというような状況の中で、新疆でも「ジャンガル物語」の語りを今から覚えようとする若者も出てきています。

### (3) バヤド人、ドゥルベド人

西モンゴルで取り上げる3つ目の集団ですが、モンゴル国西方のオプス県にバヤドとドゥルベドと言われる人々がいます。そこでも、20世紀の初めぐらまでは盛んに叙事詩が語られていました。当時の代表的な語り手として、マンディハニー・バルチン(1855～1926)が挙げられます。彼は1912年のホブド解放の戦いに加わったのですが、それを即興で英雄叙事詩にして語った(1913)ということです。

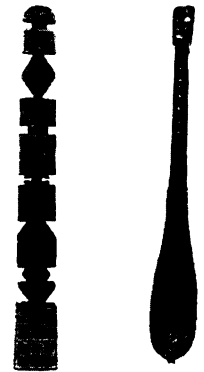
代表的な英雄叙事詩には「ダイニー・フレル」や「ボム・エルデネ」があり、「トブショール」という弦が2本だけの楽器で伴奏します。このトブショールは、ホーナルのように弦を弓で弾くのではなく、指ではじきます。

### (4) アルタイ・オリアンハイ

英雄叙事詩のメッカ西モンゴルの中でも、代々語りを受け継いできた語り手がいて、今も昔ながらの伝統的な語られ方が行われているのが、アルタイ・オリアンハイと言われる人々です。彼らはモンゴル国では一番西部の地方に住んでいます。

ここでは「ハーン・ツェツェン・ゾルハイチ」、「アギーン・ツァガン・ウブグン」、「バヤン・ツァガン・ウブグン」、「タリーン・ハル・ボドン」、「エゼン・オラーン・ボドン」などが語られ、また、資料8のような英雄叙事詩の採録が行われており、メロディーも採譜されています。

伴奏には「トブショール」という楽器が使われるのですが、バヤドで使われているものとは形が異なります。胴の部分が長円型で、棹の先にある糸巻きのような部分には「ツァツアル」という朝夕搾った乳を天に向かって撒く道具に



左が儀礼用の乳を撒くツァツアル。右がアルタイ・オリアンハイのトブショール。棹の先にツァツアルに似せて9つの穴が空いている  
(出典：小長谷有紀・楊海英編著『草原の遊牧文明—大モンゴル展によせて』財団法人千里文化財団, 1998)



1924 -  
 1923 -  
 1924 -  
 1925 -  
 1926 -  
 1927 -  
 1928 -  
 1929 -  
 1930 -  
 1931 -  
 1932 -  
 1933 -  
 1934 -  
 1935 -  
 1936 -  
 1937 -  
 1938 -  
 1939 -  
 1940 -

1924 -  
 1923 -  
 1924 -  
 1925 -  
 1926 -  
 1927 -  
 1928 -  
 1929 -  
 1930 -  
 1931 -  
 1932 -  
 1933 -  
 1934 -  
 1935 -  
 1936 -  
 1937 -  
 1938 -  
 1939 -  
 1940 -

資料7  
 「ジャングル物語」のメロディーを採譜した楽譜掲載頁。左がジャビーン・ソーナイによるもので、右がシャルフギーン・ブルブジャブによるもの  
 (出典：『后明星(1988年8期)』新疆人民出版社、1988)



(No III-1)

♪ = 48 =

(No III-2)

♪ = 48 =



1930 -  
 1923 -  
 1924 -  
 1925 -  
 1926 -  
 1927 -  
 1928 -  
 1929 -  
 1930 -  
 1931 -  
 1932 -  
 1933 -  
 1934 -  
 1935 -  
 1936 -  
 1937 -  
 1938 -  
 1939 -  
 1940 -

1930 -  
 1923 -  
 1924 -  
 1925 -  
 1926 -  
 1927 -  
 1928 -  
 1929 -  
 1930 -  
 1931 -  
 1932 -  
 1933 -  
 1934 -  
 1935 -  
 1936 -  
 1937 -  
 1938 -  
 1939 -  
 1940 -

(No IV)

♩ = 8 ♪  
 ♩ = 166



«ХААН ЦЭЦЭН ЗУРХАЙЧ» туулийн аялгуу.

Хаантунд зэрэг.

Туулийн аялгуу

Э - хэ! ЗР\_ТЭЛ У-рЫД ГЭ\_ЛЭЭ-ЛЭЭ

Э\_КЭН АН\_ХАН Тү\_рүүн ЦАГ ТАЛ ГА\_ДАА ЭЭ

ДА\_ЛАА БАЛ\_ЧИМ МӨЛ ТӨГ Э\_ЖИЛ ГАЛ\_БАР\_САН ЗАН\_ДАН МО\_ДОН

НАЙ\_ТИК ЖИ\_рээ БАЙ\_ХАД СУ\_МӨР УУЛ

ДО\_ВОН ТОЛ\_ХАА БАЙ\_ХИН НААН

資料8  
「ハーン・ツェツェン・ゾルハイチ」のメロディーを採譜した楽譜  
(出典：Ж. Цолоо, У. Загсарэн編, 《Баруун монголын баатарлаг туульс》, Улаанбаатар, 1966)



スヒー・チョイスレン  
Сүхийн Чойсүрэн  
(出典：Ж. Цолоо, У. Загсарэн編, 《Баруун монголын баатарлаг туульс》, Улаанбаатар, 1966)

形を似せて9つの穴が空いています。

アルタイ・オリアンハイでは、ジルケル(1858?~1935)やスヒー・チョイスレン(1911~79)、あるいはバータリーン・アビルメド(1935~)という人たちが語り手として有名です。アビルメド氏は今も存命で、現在モンゴル国で英雄叙事詩を語っている人の中で最も著名で、今でも2年に1回ぐらい、ひいきの家に招かれて語っているということです(補注：残念ながら、この報告書の作成中1998年秋に逝まれました)。アルタイ・オリアンハイでは、親の代から子の代へと何世代にもわたって語りを受け継がれてきましたが、正式な語り手は男性に限られます。アビルメド氏の場合は、父親が英雄叙事詩の語り手でした。また母親は、20世紀初めの最も優れた英雄叙事詩の語り手ジルケルの娘で、彼女からもいろいろな叙事詩を教わったようです。



### アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩

#### 「俗人のための仏教経典」

では、そのアルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩と語り手について少し詳しくお話ししたいと思います。今ご紹介したアビルメド氏によれば、英雄叙事詩というのは「俗人のための仏教経典」です。

アルタイ・オリアンハイでは、英雄叙事詩を語ってもらうと、仏教のお経を読んだのと同じご利益があると考えられています。子供を授かりたいなら「バヤン・ツァガーン・ウブグン」、病人が出たりする悪運を払いたいなら「タリーン・ハル・ポドン」というように、英雄叙事詩それぞれに効き目が違い、また、強い効き目のもの、弱い効き目のもの、その中間のものというように効き目の強弱があります。例えば「タリーン・ハル・ポドン」は効き目は強いのですが、それだけ副作用も強くて、ごく普通の家で語ったりするとかえってその家の運氣が悪くなったり、何度も語ると語り手の体に障るとも言われます。つまり、このような英雄叙事詩の語られ方は、仏教のお経の読まれ方を英雄叙事詩に当てはめたものと言えます。ウランバートルにガンダン寺という仏教のお寺があるのですが、ガンダン寺に行く人は自分の悩みや困っていることをお坊さんに相談します。そうするとそのお坊さんが「では、こういうお経を読んでもらってください」と勧めてくれますので、相談した人は別のところでお金を払って、法会でそのお経を読んでもらう仕組みになっています。英雄叙事詩もそれと同じように人々の悩みを解決する手段と考えられているのです。なお、資料9は、アビルメド氏のレポーターです。



右が(バータリーン・アビルメド) Баатарын Авирмэд. 左は彼の末息子でやはり英雄叙事詩の語り手であるアビルメディーン・バルタンドルジ Авирмэдийн Баландорж (モンゴル国ウランバートル近郊にて上村撮影, 1997)

#### 「アルタイの主(ぬし)」を讃える伝説や儀礼

しかしながら、仏教的な影響は表層的な部分だけであって、本質的には、アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩は「アルタイの主(ぬし)」を祭る、讃えるという性格を持っていると考えられます。アルタイの主というのは、「アルタイ山脈に住む山の神様」ということです。アルタイの変わりやすい、気難しい自然が人間の姿をとったものと考えられます。そのアルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩にまつわる伝説や儀礼には、次のようなものがあります。

語り手を招く家は、3、4日前にトブショールを家に持ってきて、上座に置



バータリーン・アビルメドの末兄で同じく英雄叙事詩の語り手であるバータリーン・オルトナサン Баатарын Уртнасан. 手にしているのがアルタイ・オリアンハイのトブショール (モンゴル国ホブド県ドート郡にて上村撮影, 1997)



資料9

- バータリン・アビルメド氏のレパートリー
- 病人が出るなどの苦しみを味わっている家  
Талын хар бодон  
Довон хар бөх
  - 狼による家畜被害のある家  
Бөх алтан нударам
  - もめごとや犯罪に関係した家  
人の土地に行き、そこになじめない家  
Бужин даваа хаан
  - 叙事詩を敬う家  
Эзэн улаан бодон
  - 家畜を失った貧しい家(富裕のための叙事詩)  
Баян цагаан өвгөн
  - 子供のいない家  
Наран хаан хувуун
  - 新婚で子供を望む家  
Аргил цагаан өвгөн

いておきます。そして、英雄叙事詩を語る前には必ず「アルタイ・マグタール」つまり「アルタイ讃詞」を語って、「アルタイ」あるいは「アルタイの主」を称えます。「アルタイ讃詞」は、英雄叙事詩と同じように楽器の伴奏やメロディーを伴う語り方をされ、そこにはアルタイの素晴らしい自然が描写されています。そしてこの「アルタイ讃詞」を語ると、アルタイの主が英雄叙事詩を聞きにやってくると考えられています。つまり、アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩は、アルタイの主にも聞かせて、主を喜ばせることで自然の恵みを授けてもらうという機能を持っているのです。

このことをよく表した次のような伝説があります。「英雄叙事詩の語り手が、精霊たちの姿を見ることのできる狩人と2人で狩りに行ったが、何日も獲物がない。そこで連れに言われて語り手が英雄叙事詩を語り出すと、山の主である精霊たちが集まって来て、彼の語りの中に聞き入った。そこに背に鞍づれのできた鹿に乗った精霊が現れて、もっと良く叙事詩を聞こうと前に進むうち、語り手の唇の上に乗ってしまい、そこから滑り落ちてしまった。そのため、英雄叙事詩の音程が狂った。その様子がおかしくて連れの狩人が笑ったので、語り手は気を悪くして語るのを途中でやめてしまう。すると、その場にいた精霊の親玉らしき者がそれに怒り、罰として、滑った精霊から鹿を取り上げて、英雄叙事詩の語り手たちに与えることに決めた。次の日、語り手と連れの狩人はその言葉どおり背に鞍づれのできた鹿を仕留めることができた」というものです。

この話は、英雄叙事詩のメロディーが二度と狂うことのないように、伴奏楽器トブショールを作ったという、トブショールの起源話話になっています。

また、夏と秋には叙事詩は語ってはいけないことになっています。なぜならば、夜が短くて筋をすべて語るができず、語り手の体に良くないと信じられているからです。夏の暑い時期に英雄叙事詩を語る独特の低い声を出す、語り手はのどを痛めてしまうと言われていました。それに、先ほどお話ししたように、英雄叙事詩はマンガスがその象徴となっている「冬」や「死」を退治するという神話的意味を持っているわけですから、英雄叙事詩はモンゴルの厳しい時期、つまり冬や食料の乏しくなる春に語るものであって、素晴らしい季節である夏と秋に語ってはいけないと解釈できるのです。

アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩の語り方の音楽的側面

最後に、アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩の語り方の音楽的側面についてお話ししたいと思います。今日、アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩の語り方は、モンゴル国を代表する口承文芸の中心的な存在とされています。

アルタイ・オリアンハイの独特の低い声で語る英雄叙事詩の語り方は、声の出し方が「ホーミー」によく似ています。ホーミーとは、ひとりの人間が2つ以上の音を同時に出す歌い方を言い、モンゴル国の西部で盛んな唱法です。モンゴル国北隣のロシア連邦トゥヴァ共和国にも「ホーメイ」という名前で同様の歌い方があります。ホーミーまたはホーメイは、喉の奥から出す通奏低音を共鳴させ、高い倍音を同時に出します。そのひとつの歌い方に「カルギラー」と呼ばれる唱法があります。一般のホーミーあるいはホーメイよりも、さらに低い分数倍音を出すのが特徴で、この点がアルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩の語り方と共通します。ホーミーやホーメイのように喉の奥から通奏低音を出

す唱法は、まとめて「喉歌」と呼ばれています。アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩の語り方も、この喉歌の一種と考えることができます。現在のモンゴル国では、英雄叙事詩の語り方とホーミーとは全く別のものとされていますが、先ほどご紹介したジルケルの時代には、英雄叙事詩の語り、ホーミーが間奏のように歌われていたと言われていました。

アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩の語り方は、カラムイクのツァーガンザムを除き、モンゴル系の人々の間では共通する語り方が見られないと言っているのですが、モンゴル系以外では、アルタイ山脈周辺に住んでいるチュルク系のハカスやアルタイ、ショルといった民族の英雄叙事詩の語り方に共通するものが見られます。ショルやハカスの人々は、モンゴル国の西北に住んでいます。最近日本でも公演がありましたのでお聞きになった方もいるかもしれませんが、ハカスでは「チャトハン」という7本弦の琴を英雄叙事詩の語りの伴奏として使っています。ハカスでは英雄叙事詩の語りを「ハイ」と言うのですが、このハイとは英雄叙事詩の語りも含めた喉歌全体を指しています。西モンゴルで英雄叙事詩の語り方を指す「ハイラハ」という言葉は、ハカスと共通するハイという名詞に、名詞を動詞にする語尾がついて「ハイラハ」という言葉になったと解釈ができます。また、アルタイ山脈の北部に住むアルタイという民族の間では「マーダイ・カラ」などの英雄叙事詩を、ドンブラという楽器の弾き語りでも語りますが、これを「カイ」と呼んでいます。このカイもハカスのハイと共通する言葉です。

ところで、喉歌のバリエーションのひとつに、通奏低音を自分の喉から出し、かつ高い倍音を「ツォール」という笛から出す独特の奏法があります。このツォールを使った演奏の分布は、ほかの喉歌のジャンルであるホーミーや低い声で語るハイやカイなどの唱法の分布と重なっています。

口承文芸を支える「声」の持つ魅力

先ほど、英雄叙事詩の語り手が山に狩りに行き、山の主や精霊たちを相手に英雄叙事詩を語り、獲物を得たというアルタイ・オリアンハイの伝説を紹介しましたが、アルタイ民族の間では、英雄叙事詩を語る代わりにツォール(アルタイ語ではショール)を吹いて山の主から獲物をもろう、という同様な伝説があります。ハカスにもこれと同様の伝説があるようです。このように、喉歌は狩猟と深い結び付きを持ち、喉歌を山の主に聞かせることで狩りの恵みを得ることができると考えられていたことが分かります。

アルタイ・オリアンハイや、ハカスやショル、アルタイといった人々は、現在はそれぞれ異なる民族に分類されていますが、住んでいる地域や狩猟をよくするという生業において、また信仰の面でも、共通の文化を持った人々たちと言えます。喉歌は彼らに共通の文化や伝統の一部なのです。アルタイ・オリア



名人ナランツォグト Наранцогт と彼のアルタイ・オリアンハイのツォール (モンゴル国ホブド県ドート郡にて上村撮影、1995. 8)



ハカスの「チャトハン」 (写真協力=画川礼緒)





ンハイでは、狩人たちが獲物に出会うとホーミーを歌って獲物を立ち止まらせ、そこを狙い撃ちにすることもあったということです。また、泣き止まない赤ん坊には、今でも子守り歌代わりにホーミーを聞かせることがあります。狩りの獲物はアルタイの主のものであり、これは聖(自然)的な存在と言えますし、一方、赤ん坊は、人間であっても人間になりきれない聖的な存在と考えられていました。つまり、アルタイ・オリアンハイでは、喉歌は人間の領域に完全には属さない聖的な存在とのコミュニケーションの手段として用いられてきたのではないと言えます。

前回の始めに、家畜に対するかけ声(コーリング)について、広い意味での口承文芸としてお話しましたが、ホーミーやアルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩の語りなどの喉歌も同じように口承文芸に共通する「声の技術」ととらえられます。この人間の声そのもので対象を操作しようとする力を持つという点で、ホーミーや英雄叙事詩の語りなどの喉歌は特筆に値すると言えます。モンゴルの口承文芸が社会において一定の機能を果たしてきたのは、この声そのものの持つ魅力に負うところが大きいのではないのでしょうか。

## 第5章 モンゴル人民革命以降の文学 第2次世界大戦前まで 講師 岡田和行